

知求会ニュース

2013年12月

第48号

◎ 訃報

田所 竹彦先生が2013年8月14日にご逝去されました。先生は1994年4月に教養学部に着任され、国際学部創設時の主要教員として2001年3月に定年退官されるまで、国際ジャーナリストの経験に基づいた知見を私達にご披露くださいました。生前の学恩に感謝し、ご冥福を祈念いたします。(合掌)

◎ 教職員人事異動

小竹 章裕さん

3年3ヶ月在籍されていた事務職員の小竹さんが7月1日付で小山工業高等専門学校に異動されました。後任には、泉山隼人さんが着任されました。

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 0名・社会人 0名・外国人 1名 計1名

国際文化研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人 2名 計4名

国際交流研究専攻 一般 2名・社会人 1名・外国人 3名・

国際交流・国際貢献活動経験者 2名 計8名 合計13名

○刊行案内

HANDSプロジェクトから『教員必携 外国につながる子どもの教育3』が刊行されました。

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第14号(2013年9月2日)

はじめに 国際学部長 HANDSプロジェクト代表 田巻松雄

2013年度子ども国際理解サマースクール

HANDSプロジェクト コーディネーター 船山千恵

「拠点校」は40校、「日本語の先生」は56人(第1回)外国人児童生徒支援会議報告

国際学部特任准教授 若山秀樹

進め日本語教室第5回 よろしくお願ひします。

真岡市立真岡西小学校教諭 塩野谷佳之

在日ブラジル人「第二世代の語り場」に参加して

財団法人日伯経済文化協会(ANBEC) 栗田政彦

真岡市スペイン語教室「AMAUTA」学習支援 活動報告

国際学部国際文化学科1年 遠藤さくら

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記 10 少しでも力になれば

国際学部国際社会学科 4年 桑川紘慧

学生ボランティアの支援があったからこそ

栃木市立栃木中央小学校教諭 花田としか

事務局便り

- ・ 「多言語による高校進学ガイダンス」
- ・ 「外国につながる子どもフォーラム 2013」

第 15 号(2013 年 11 月 11 日)

「ガイダンス」「協議会」報告

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 田巻松雄

多言語による高校進学ガイダンス(10月27日、本学にて)

伊木ロドリゴ(豊田市立保見中学校教員)さんによる体験談発表より

「夢を持とう、人生は自分次第！」

参加者や協力者からの感想

多言語による高校進学ガイダンス(地域開催)のまとめ

「多言語による高校進学ガイダンス」を振り返って

那須塩原市教育委員会学校教育課 指導主事 山本幸子

「多言語による高校進学ガイダンス」を開催して

栃木市教育委員会学校教育課 指導主事 藤間亮子

栃木市における「多言語による高校進学ガイダンス」(2013. 10. 5)体験談発表より

栃木県立宇都宮南高等学校 1年 マリエル アギーレ

「サマーキャンプ」報告

インストゥット エドゥカーレ JT 事務局 増田久江

「かけはし」＝「架け橋」を目指して

小山市立小山城東小学校 教諭

小山市外国人児童生徒適応教室「かけはし」担当 山本一弘

学生ボランティアの座談会の中から

教育学部スクールサポートセンター コーディネーター 辻 猛司

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記 11 共に感じて、共に学ぶ

大学院国際学研究科博士前期課程 2年 鄭 思宇

温かな支援に感謝

鹿沼市立東中学校教諭 廣田美佳子

事務局便り

- ・ 「外国につながる子どもフォーラム 2013」の開催

◎ 平成 25 年度 第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2013 (平成 25) 年 9 月 25 日(水)午後 4 時から、宇都宮大学附属図書館会議室(3階)にて、平成 25 年度第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・井本英夫 理事・茅野甚治郎 理事・加藤幹彦 理事の大学側 4 名と事務局担当者 4 名、土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・柴田 毅 教育学部同窓会会長・小林哲夫 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・上澤和彦 工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・金子幸雄 農学部同理事長の同窓会側 7 名でした。議事内容は、協議事項として、特になし。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 3 月 30 日発行) 3 面に、「ニーズ集め国に政策要望 福島原発事故を受けて 乳幼児・妊産婦支援 2 年 実効性ある支援法運用を」の内容で、[清水奈名子](#)先生の記事が掲載されました。
2. 朝日新聞 朝刊 (平成 25 年 3 月 30 日発行) 26 面の「発信」に、「言葉の壁」サポート 宇都宮大「HANDS プロジェクト」3 年 小中学校と連携強化 「情報共有の核に」の内容で[田巻松雄](#)先生と[船山千恵](#)さんの記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊 (平成 25 年 5 月 12 日発行) 3 面に、「地方の貧困など宇大で公開講座 25 日から全 5 回」の内容で[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
4. 読売新聞 朝刊 (平成 25 年 7 月 14 日発行) 27 面の「宇大・読売 共催講座」に、「人間重視の国際学」考える 国際学部・清水奈名子准教授」の内容で[清水奈名子](#)先生の記事が掲載されました。
5. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 7 月 21 日発行) 20 面に、「日本語指導」考える一助に 宇大のプロジェクト」と題して、「教員向け指導書刊行」の内容で、[HANDS\(ハンズ\)プロジェクト](#)と[若林秀樹](#)先生の記事が紹介されました。
6. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 9 月 24 日発行) 1 面に、「県立高入試の外国人優遇」と題して、「宇大調査、利用者「ゼロ」 南米系は蚊帳の外？」の内容で、[HANDS\(ハンズ\)プロジェクト](#)の記事が紹介されました。
7. 下野新聞 朝刊 (平成 25 年 11 月 17 日発行) 22 面の「教育・学ぶ」に、「今月は生涯学習推進月間 放送大学、県民カレッジ・・・ 意欲あれば多様な学び」の内容で[福田一夫](#)さん(博士後期課程・国際学研究専攻・2 期生)の記事が掲載されました。
8. 下野新聞 朝刊 (平成 25 年 11 月 17 日発行) 1 面に、「正造 最後の演説資料 遊水地化の損害予見 栃木市の旧家で発見」の内容で[高際澄雄](#)先生の記事が掲載されました。
9. 日本経済新聞 朝刊 (平成 25 年 11 月 30 日発行) 39 面の「ひとが動かす 地域変える海外の目⑤」に、「日本文学、英語を通じ学ぶ 「お互いさま」 人情に感動」の内容で[バーバラ・モリソン](#)先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 日本経済新聞 朝刊 (平成 25 年 12 月 5 日発行) 29 面の「キャンパス発 この一品」に、「たべてみ天—中村学園大」生態系、おいしく守る」の内容で、国際学部卒業生の後藤恵美さん(国際社会学科・3 期生)の記事が掲載されました。
2. UU now32 号 (平成 25 年 11 月 20 日発行) 1・2・3 面に、「台湾と日本をつなぐ チャレンジ!」と題して、阿部久美子さん(国際社会学科・1 期生)が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/32/uunow32.pdf>)
3. UU now32 号 (平成 25 年 11 月 20 日発行) 8 面の「Welcome to 授業」に、「国際学部地球市民社会論」と題して、重田康博先生が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/32/uunow32.pdf>)
4. 下野新聞 朝刊 (平成 25 年 3 月 5 日発行) 24 面に、「政府招へい東ティモール学生 震災復興県内つづさに 生の情報、本国で発信へ」と題して、「宇大生の支援活動も学ぶ」の内容で長門芳子さん(国際文化学科・1 期生)が会長をしている「いつくから国際文化交流協会」の記事が掲載されました。
5. 毎日新聞 朝刊 (平成 25 年 3 月 12 日発行) 26 面の「震災 2 年栃木から」に、「精神的なケアも」宇大でフォーラム ボランティア体験報告」の内容で松田大樹さん(国際学部 3 年)の記事が掲載されました。
6. 朝日新聞 朝刊 (平成 25 年 3 月 30 日発行) 26 面の「発信」に、「学生ボランティア派遣 浸透徐々に依頼増」の内容で桑川紘慧(ひろえ)さん(国際学部 3 年)の記事が掲載されました。
7. 下野新聞 朝刊 (平成 25 年 8 月 25 日発行) 20 面に、「宇都宮大 オープンスペース好評 気軽にグループ学習 学部超え交流 人間的成長も」の内容で石田沙希(さき)さん(国際学部 3 年)の記事が掲載されました。
8. UU now32 号 (平成 25 年 11 月 20 日発行) 12・13 面「宇大生は今! —地域で活動する学生たちを訪ねて—Vol.6」に、「お買い物で世界を変えよう! カケハシーズ<KAKEHASEEDs>」と題して、飯島 彩さん(国際文化学科・2 年)が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/32/uunow32.pdf>)

研究室訪問 40 第 9 号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 40 回には地球文化形成研究講座所属の大野斉子先生にお願いしました。

「興味の追究が世界を開く」

大野 斉子

宇都宮大学の国際学部で表象文化論という講座を担当しています。表象文化論というのは、ジャンル(絵画、映画、音楽など)を問わず、またそれが置かれている社会的な役割等に関わらず、表現されたものすべてを表象としてとらえて研究していこうという学問分野です。表象という概念はかなり抽象的なものであり、それだけに個々の学術領域を超え

た思考を可能にしてくれる大きな枠組みなのです。

当然というべきか、私のゼミの学生たちの研究テーマも多岐にわたります。化粧、ファッション、バレエ、絵画とそれぞれが自分の興味あるテーマを好きなように追究しています。学びたいことを自分なりの方法で考えるのは楽しいもので、自由で活気ある研究室となっています。

さて、では私が表象文化論を専門分野としているのかということそうではありません。私の専門は大学時代から一貫してロシア文学・文化研究です。大学生の時の勉強と言えば、来る日も来る日も分厚い辞書と首っ引きでロシア文学のテキストを読むというものでした。

私が教わった先生たちは大変な専門家ぞろいで、様々な辞典や文献を駆使しながらいかに原典を読み解くかということを教えていただきました。確かに地味な作業ではありますが、その読みの緻密さや思考の幅広さを通して、テキストに向き合う知的な誠実さといった知に対する態度を深く学んだように思います。

私がロシア文学を選んだのはドストエフスキイの作品が好きだったからです。これに人生を費やそうと思ったのは若気の至り、かもしれませんが、確かにそれだけの価値はあったのです。

ご多分に漏れず悩み多き学生時代であったわけですが、その悩みの一つは、自分は世界のことを何も知らず、世界を見る目も持っていないという焦りであったように思います。しかしドストエフスキイの作品を読むと目の前にドアが現れ、そのドアが次から次へと開いて外へと導いてくれるような気分を味わいました。

実はドストエフスキイの研究をしつつも、個人的に最も愛し、こだわったところはなぜか研究の対象にはできませんでした。その代り私は文学テキストの上には出てこない部分を研究対象に選びました。文学と関わりながらも問題として表面化しにくいところ、まだ視野にすら入っていないようなもの、しかし研究したら面白いものが見えてきそうなもの。たとえば 19 世紀のロシアの出版物や作家たちの活動などについて。あるいは 18 世紀の宮廷文化について。あるいはロシアの最初期の映画について。あるいは香水についてです。

こうしてみるとばらばらで互いのつながりなどなさそうですが、表面的に見て読み取れるようなつながりに何の意味があるのでしょうか。私が一貫してテーマ選びの基準としてきたのは面白そうかどうかの一点です。すなわち私に新しい世界を見せてくれるか。驚きや考え方の大きな転換をもたらしてくれるか。どこまでも自分中心なようですが、私のやっている分野の研究は個人の興味を追求して突き抜けたところに公共性が生じます。

今は香水の研究をしています。シャネルNo.5 を作った調香師はロシア出身だったということから、帝政時代にロシアの香水文化や香水産業がどれほど発展していたかを掘り起こす作業です。香水は単なる嗜好品ではなく、嗅覚の芸術であり、神秘思想や科学の発展と深くつながっている、奥の深いテーマです。まだまだやることは多く、終わりは見えません。

研究を趣味でやっているとは思っていませんが、やはり個人的な趣味嗜好というものは大きくかかわってきます。そして元来悪趣味なため、調和に満ちた理想的な美よりも歪みや破綻のあるものに、正統的なものよりも奇想に満ちたものに惹かれてなりません。その結果、あまり顧みられることのなかったおかしなもの、たとえば本文のない挿絵本や生首をかたどった食器、現像に失敗した映画フィルムなどを手掛かりにして文化の森へと分け入っていくのです。

たいてい、そこには磨けば光る原石が落ちています。変なものではあっても、そこには紛れもなく美があります。生み出された当時の知や欲望を凝縮した美、あるいはそうしたものを伝える見事な明解さという美です。

宇都宮大学に来て学生と授業をする中で、あるいは子育てをする中で気づかされたことが一つあります。美しいものへの愛は生命とつながっているということです。日々成長し、輝きを増す学生たちはそれを体現する生きた見本ですが、文学や文化が好きであればこそ研究してきたのに、自分でそのことを言語化して認識するのにずいぶん回り道をしたような気がします。教える側、育てる側になって初めて見えてくるものがあるようです。

(2013年12月3日原稿受理)

博士録 23 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 23 回目には伊藤研究室 OG で京都大学から学位を取得された**鄭楽静**さんにお願ひしました。

鄭 楽 静

「在日中国人社会の歴史と現状——在日温州人を中心に」

論文要旨

本論文は在日温州人に関する包括的研究である。従来の在日中国人研究における「老華僑華人研究」と「新華僑華人研究」の分断、及び中国人新移民内の特定のグループだけを取り上げるといったような研究現状を補うために、本論文は在日温州人というコミュニティに焦点を当てて、中国人の日本への移動・適応・定着／再移動の一断面を示めようと試みた。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章では、まず本研究の問題意識と研究目的について述べた。次に、中心的な概念について検討を加えた。さらに本研究のアプローチ方法である文献調査と実態調査について概観的に紹介した。

第一章では、在日中国人社会の形成史と在日温州人社会の歴史について論じた。第 1 節では 16 世紀後半から 1972 年の日中国交正常化までの在日中国人社会の歴史を四つの段階に区分し整理した。第 2 節と第 3 節においては、在日温州人社会の歴史を二つの段階に分けて考察した。第一段階として、第一次世界大戦末期から 1923 年の関東大震災まで、出稼ぎ労働と行商を中心とする在日温州人社会の繁栄期を描いた。第二段階として、1923 年の関東大震災以降から 1972 年の日中国交正常化まで、日中関係に翻弄された在日温州人の歴

史の空白期に触れた。

第二章から第四章までは、実証研究を通して、日中国交正常化以降の在日温州人新移民の実態に迫った。まず、第二章の第1節において、1972年以降の在日中国人社会の変化を概観した。続いて、第2節では、日中国交正常化以後の温州と日本の接点について触れた。そして、第3節においては、構造化インタビュー調査の結果分析を通して、マクロ的な視点から在温州人社会の実態を把握しようと試みた。

第三章と第四章では、二年間にわたる実態調査に基づき、ミクロの視点から在日温州人社会の実態を描写し、分析した。一人一人のライフストーリーを通し、第三章では1986年以前に来日した温州人、第四章では1986年以降に来日した温州人に関する移住動機、定着形態、社会変容などの実態を析出した。

終章においては、以上の在日温州人に対する考察を総括し、在日温州人研究は在日中国人研究においてどのように位置づけられるのかを再考した。さらに、本研究から導き出された理論的インプリケーションと実践的インプリケーションを明示した。最後に、残された課題について触れた。

本論文は、以上の通時的及び共時的研究を通して、在日温州人社会の形成と発展を追いながら、在日中国人社会の歴史と変容の一側面を描きだしてきた。

修了後のご報告

中国での就職活動の感想

宇都宮大学と中国の寧波大学が交流協定を締結した御蔭で、2004年の春、夢に思った日本留学がやっと現実に叶いました。宇都宮大学で勉強している間、指導教官の伊藤一彦先生、内山雅生先生、松金公正先生など、多くの先生方から丁寧に温かくご指導いただき、この場を借りて、深く感謝の意を表します。

海外留学背景を持っている「海帰」が年々増える中国においては、就職事情も厳しくなりつつあります。私は博士論文を書きながら、就職活動を始めました。在日温州人を研究テーマにしている私にとって、第一志望は華僑華人分野で有名なアモイ大学でした。しかし、応募者の学部出身校が「211 project 大学」（中国の超名門大学）ではないといけないという制限条件に、寧波大学出身の私に面接のチャンスさえくれませんでした。ちょうどその時、母校の寧波大学で海外華人研究院が新設されて、華僑華人研究者を募集し始めたので、私は応募し無事に受かりました。労働契約を結ぶ際に、「三年以内、必ず□著作一本を出版しなければならない □一つの国家社会科学基金プロジェクトを獲得し、あるいは二つの省レベルの研究プロジェクトを獲得しなければならない。以上の条件に達していないと、三年後労働契約を解除する」という厳しい条件にびっくりした一方、プレッシャーを身近に感じました。中国では、大学教員という業種はすでに「親方日の丸」ではなくなりつつあります。でも、プレッシャーが動力にもなるので、努力すれば必ず実を結ぶはずと信じて頑張っています。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第8期修了生)

(2013年12月3日原稿受理)

知究人 23 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は投稿者がいらっしゃいませんでした。

海外だより 17 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外在住者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

海外留学今昔 09 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 06 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。

「時間と距離を超えた繋がり ～国際インターンシップの経験から～」

宇都宮大学農学部2年 土橋 優平

私は今回夏休みの2週間を利用して、国際インターンシップに参加しました。国際インターンシップは昨年から宇都宮大学(以後宇大)で始まった事業で、国内の企業研修が海外へ飛び出たものです。私はここで「人の繋がり」を強く感じ学びました。

今回はタイにあるMSLというフォークリフトを扱う企業で研修を行ったのですが、そこでの仕事や普段の生活面は宇大国際学部OBの佐藤友樹さんにお世話になっていました。空港からホテルまで、またホテルから会社までの送迎、仕事後の観光、食事などなど、この2週間は佐藤さんにお世話になりっぱなしでした。もともと話好きだった私は車中常に話していたように思います。やはり社会人の方のお話は、私たちがすむ世界とは全く違う世界にすんでいるせいか、とても新鮮で面白く感じました。海外で働いているという点も、その興味を注ぐ一つの大きな要因となりました。佐藤さんはとても真面目で優しく、私たちに仕事のことやタイでの生活について知ってもらおうと熱心にお話してくださいました。指導者というよりも、大学の先輩、人生の先輩という感覚が強かったように思います。実は私たちはタイに到着してすぐ食中毒にかかりました。程度に差はあれど、3人全員です。その結果研修1日目から、私達は病院にいることになったのです。朝早くから病院まで送ってもらったり、大学や家族に連絡をしてもらったりと、仕事に関係のない余計な手間をかけさせてしまったな、と申し訳なく思っています。私の場合、食中毒の他に細菌感染という怖い単語まで聞かされ、一度は頭に死という言葉までよぎったわけですが、今考える

といい思い出です。もう海外で、滅茶苦茶な食事はしません。話は戻りますが、佐藤さんは素晴らしい方々との食事をセッティングしてくださいました。同じくタイで働く、宇大OB、OGの方々です。そこには私たちが良く知る「ナムチャイ」というサークルの創始者がいました。みなさんのお話を聞いている間、驚きや笑いが止まりませんでした。バックパッカーとして世界を旅した話、昔ナムチャイでタイに来た時日本では考えられないような生活をしたこと、今の職に就くまでの経緯、世界で働くということについて。最高に充実した時間でした。自分たちの先輩が、過去にいろいろな経験を積み、こうやって今は世界で活躍しているのか、と思うと、勇気が溢れてくるようでした。私はいつも自分に甘えてしまいます。「今はまだいいか」「こんなもんで大丈夫かな」と。しかし、こうやって人生を存分に楽しみ、一生懸命今を生きている人々を見る度にいつも思います。「こんなふうにカッコよく生きたいな」「まだまだ自分にもできることはあるのではないか」と。もっともっと自分の可能性を追い求めたいと強く思いました。そして今の自分たちは、過去に頑張ってくれた人々がいるおかげであるのだということ。これは普通に生活している時は気付きにくいことです。しかし、世の中に存在するすべてのものには必ず過去にその貢献者がいることは事実です。彼らは未来に生きる人々に何かを託したかったのだと思います。だから私はその想いに応えたいです。そして私も彼らのように、次代を担う人々に何か残せるような人間になりたいです。まずは宇大を、もっと面白い大学に創り上げていこうと決めました。私の代で一気に変えることはできません。だから未来に残る仕組みを作りまします。大学生がより自分たちの可能性を拓けられるような、ありあまる体力と時間を有効に使うことのできる仕組みを。それが今の私の使命だと思っています。まずは自分が変わること。自分で限界というラインを決めず、常に挑戦すること。そして今を一生懸命生きること。これが今の私にできることです。

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。

(農学部 生物生産科学学科 2年在学生)

(2013年12月8日原稿受理)

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第12回目には田巻研究室OGの**本間瑞穂**さんをお願いしました。執筆者の都合により次号へ掲載を延期します。

フォーラム 2013年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 田巻研究室OBの**福田一夫**さん、田巻研究室OGの**西出幸代**さんと吉田研究室OBの**中村能盛**さんをお願いしました。

「近況報告」

福田 一夫

満期退学から 3 年、課程博士という先生方とのお約束が果たせぬまま今日を迎えております。しかし、博士号を諦めてしまったわけではありません。現在は、放送大学教養学部
に籍を置き生涯学習の一環として、放送大学の卒業研究や学術誌への投稿に挑戦しております。「精神障がい者を対象とした経営学構築の試み」を研究するのがライフワーク化しております。未だ、学術誌に掲載されるような論文は書けていないのが現実です。そんな私からの近況報告を聞いてください。

精神障がい者の問題をテーマにしてきたのには、私自身の精神障がい
が根底にありました。日光市で「まちにとびだす障がい者の会」という任意団体の代表を務める羽目になったのも偶然ではなかったようです。当会は、精神障がい者を中心に集まった仲間
で構成され、それぞれのできることから始めて、「障がい者による 障がい者のための 障がい者福祉」の実現に向けた取り組みを日々実践しているところです。その一環として、本年度、日光市個性ある地域振興事業に応募し、事業名「障がい者の「働く」を実現する」として採択されました。そちらの活動予定を紹介させていただきます。

来年 2 月 11 日（火）建国記念の日に、啓発セミナーを開催いたします。講師は、東京国際大学の齋藤敏靖教授にお願いいたしました。齋藤先生は、博士課程で、乗り越えなくてはならない論文として向き合った『精神障害者の「就労」モデルの構築』の著者で、そのことをお伝えすると、快く講師を引き受けてくださいました。講演後、ティタイムを挟んで、「障がい者が食べていくにはどうしたらよいか」をテーマにワークショップを行う予定で、皆様のご参加を心待ちにしております。会場は、日光市民活動支援センター。13 時からの開催予定です。もう一つイベントがあって、3 月にミニ映画上映会も予定しております。2 つのイベントを通して、障がい者の「働く」を実現させるために勉強する仲間を集めるのが本年度の目的となっております。

最後に、皆様にどう思われるか心配ですが恐れずに告白すると、2 つ目の博士課程進学に向けて準備を始めました。2014 年度、放送大学に博士課程が設置され学生募集が始まるのを受けて、冷めやらぬ野心を燃やしております。

宇都宮大学在学中と異なり、仕事にも従事する中で、忙しいけど大変充実した日々を送っております。日々挑戦することで、自己の成長を感じられる幸せを実感しているのが今の私です。その基礎を与えてくれた宇都宮大学大学院国際学研究科に感謝しております。

（国際学研究科 国際研究専攻 第 2 期満期退学生）

（2013 年 11 月 19 日原稿受理）

「マレーシア便り」

西出 幸代

宇都宮大学の先生方お元気でいらっしゃいますでしょうか。

私がこの『知求会』に寄稿するのも2回目となります。私が修士課程を修了してから5年になりますでしょうか。随分と時間が経ちましたが、私自身は毎日必死に生きており、あつと言う間のことの様な気が致します。正しく光陰矢の如しの感があります。

さて、あれから静岡にて日本語教師をしておりましたが、2012年から2013年にかけてマレーシアに行っていました。

これまで海外の経験として、青年海外協力隊でベトナムハノイ貿易大学にて2年、ブラジルでは、あの2005年NHK放送された橋田寿賀子脚本、森光子・野際陽子主演で日系ブラジル移民を描いたドラマ『ハルとナツ』の舞台でもあった日系移民発祥の地とも言われるサンパウロ州ノロエステ地域にてJICA日系社会シニアボランティアとして日本語指導に携わりました。

今回のマレーシアは、同じく日本語講師としての仕事でしたが、これまで日本のODA、円借款で行っていたものをマレーシアに移管した直後の講師公募に応募したものでした。その滞在中に気に留まったことを徒然にお伝えしようと存じます。

同僚だったマレーシア人の先生に宇都宮大学工学部大学院を修了された先生がいましたが、ご本人が在学中国際学部大学院に在学していた方は、現在外交官だそうです。マレーシアでは、留学先が筑波大学と宇都宮大学に限られているとのことでした。

雇用主はマラ教育財団 YAYASAN PELAJARAN MARA(MARA EDUCATION FOUNDATION)です。学生はいずれも選ばれた学生ばかりで、マレーシアの高校卒業時試験でA+の成績でないとオファーが行かないそうです。また、全寮制で全ての学費がマレーシア政府から出ているので、裕福な家庭の子息は入学が許可されません。本年度は、ホンダマレーシアの社長子息が面接に来たそうですが、入学許可は当然ながら下りませんでした。本人は純粋に日本に行けるプログラムであるから是非行きたいとのことだったのですが、残念です。このプログラムは、Malaysia Japan Higher Education Program と呼ばれており、Japanese Associate Degree Program で日本との単位交換制になっています。また入学はマレー人に限られています。(純粋な中華系、インド系の学生はおりません。)

マレーシアにて、日本の理工系大学三年時編入のための日本語力をつけ、同時に日本語で理工系の基礎知識も修めます。日本語については拓殖大学、理工系学科については芝浦工大が請け負っています。もちろんその二大学からも教授が派遣されておりますが、契約講師として私達が採用されます。

マレーシアでは、ご存知の通りルックイースト政策が取られております。私の滞在中に30周年記念式典があり、マハティール元首相と奥様を間近で拝謁することもできました。そこには、大使館関係者を初め日本と韓国の代表が招待されており、その下座に加えて頂いた訳です。

日本語学習を始めて半年ほど経った頃には、学生達にクアラルンプール国際交流基金スキット大会へ応募させましたが、下記URLから作品が見られますので是非ご覧ください。

☆アウザーンチーム「笑いのある人生」

http://youtu.be/DSKs_a8mmN4

☆ダイナミックチーム「同じけど違います」

<http://youtu.be/vB8An7FaP7I>

☆ニコンチーム「マレーシアか日本」

<http://youtu.be/syQVdBr2Jys>

まだまだお話できることはございますが、紙面に限りがございますので、またの機会にお伝えできればいいですね。では、また。御機嫌よう。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生)

(2013年11月28日原稿受理)

「名古屋大学の博士後期課程について」

名古屋大学大学院 文学研究科 人文学専攻 第2フランス文学研究室所属

中村 能盛

2013年3月に国際学研究科の博士前期課程を修了してから、1年近い歳月が経過しました。同じ年の4月に名古屋大学大学院の博士後期課程に入学して、世紀転換期の日本のフランス語教育とフランス文学受容を研鑽しながら、同時に名古屋市内の大学でフランス語非常勤講師、フリーライター、翻訳などを行っています。

国際学研究科に在籍していた2年は瞬く間に過ぎて行きました。入学する前から週2日の通学で修士号を取得出来るという情報を入手していました。その為、週2日は都内の実家から始発の電車に乗り、上野駅出発のローカル線のグリーン車で宇都宮へ通学していましたが、車窓に広がる埼玉県北部と栃木県の景色を見る事は通学時の癒しでした。

私の博士前期課程の指導教員は吉田一彦教授です。ご多忙にも関わらず研究室訪問の予約を取った後に研究室へお伺いして、参考文献の紹介や分析の手法に関するアドバイスをいただいた事は、今でも深く感謝しており、私にとって生涯の恩師です。

大学院生は研究だけが生活の全てではありません。宇都宮大学で講義や研鑽などで半日近く過ごした後に、大学近隣のレストランやショッピングモールで、友人達と映画や食事に行った事も大学院生活では大事な思い出となっています。

宇都宮大学の博士後期課程への進学を考えていましたが、募集定員が3名と非常に狭き門だった為、募集定員数の多い名古屋大学大学院文学研究科を志すようにしました。修士1年次、2011年12月の決断です。

私の具体的な研究テーマは、博士前期課程時代と変わらず「暁星学園刊行フランス語講読教科書の分析—文学作品の抜粋と掌編作品が果たした役割—」というフランス文学研究

の範疇では、極めて特殊な内容であり先行研究が零に等しい状態だったので、好きな様に分析する事が出来たので、修士1年目の終りには修士論文を半分近く執筆していました。

修士2年目の12月に提出し、無事に現役で名古屋大学の文学研究科に進学する事が出来て、博士後期課程の1年目から学会の発表や非常勤を担当するようになったので、2013年度の目標は全てクリア出来たと自覚しています。

今年の4月に名古屋大学に入学しましたが、環境の違いは否定し難いものがあります。人文科学系の研究科が5つあり、私を含め博士後期課程の学生は、所属する研究科だけではなく他研究科のゼミや読書会に積極的に参加しています。

博士後期課程の学生全員が本気で研究者を目指す為、朝から夕方まで研鑽に勤しむという環境は、私にとっては最高の環境です。また、全国大会のみならず、海外で発表する学生も常識となっています。このような素晴らしい環境下で、私も博士号を取得し、大学教員として就職出来るよう、同じ若手研究者達と共に邁進して行きたいと考えています。

最後になりますが、宇都宮大学大学院国際学研究科の益々のご発展とご成功を祈願して、本文の末尾とさせていただきます。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第13期修了生)

(2013年12月3日原稿受理)

お知らせ

宇都宮大学本部より、第3回ホームカミングデー開催の日時案が決定されました。来年の平成26年大学祭開催期間中(平成26年11月22日(土)から23日(日))に開催予定。)です。なお、行事の詳細は後日改めてお知らせします。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の第8号の内容は、1イタリア 高失業率 若い求職者の現状 2 EU支部だよりー世界の若者の7~8人に1人は職がない現実ーについてです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●今回のニュースは、編集者の力が及ばず誌面を縮小したものになってしまいました。特に国際学部同窓生にかかわるコーナーです。この誌面は本来、大学院国際学研究科修了生・在学生だけのものでしたが、国際学部同窓会の活動を後方支援するために拡張したものです。卒業生・在校生との面識がない中での編集には限界があります。そこで、国際学部卒業生・在学生・教職員の皆様方に切にお願いいたします。それは寄稿者の推薦と連絡方法などの情報提供です。FACEBOOKを使用して卒業生にコンタクトを試みていますがうま

くいかない場合が多いです。従って、編集者から友達リクエストがありましたらよろしく
お願いいたします。

●現在、メディアは新聞という信頼性のものと電子版という速報性の両面をうまく使い分
けることができる便利な時代です。知求会では入学時と修了時にメールアドレスを登録し
ていただいて、メーリングリストによる知求会ニュースを配信しています。しかしながら、
アドレスの変更による連絡不通という脆弱な部分も抱えています。知求会会員の自主的な
双方向の連絡に頼らざるを得ないものになっています。知求会会員の皆様にはその点を十
分にご理解の上、メールアドレスなどの変更がありましたら速やかに事務局への連絡をお
願いたします。

●来年(2015年10月)は国際学部創立20周年を迎えます。そして、11月の大学祭開催中に
第3回ホームカミングデーが開催されます。開催された際には多くの同窓生に参集してい
ただき、過去の記録を塗り替える盛大なものにしていきたいと思います。

●来年3月末日に、友松篤信先生と高際澄雄先生が定年退官されます。おそらく2月頃に
最終講義が開催される予定ですので、宇都宮大学HPや国際学部HP、そして、この知求会
ニュースが掲載されている国際学部同窓会HPを注意深くご覧ください。

●宇都宮大学HPがいま興味深い。それは知求会ニュースを編集集中に気がついたことです。
宇都宮大学オンデマンド(U-Tunes)が新設されていました。宇都宮大学の「ライブ」が伝え
られています。知求会ニュース「学生サロン」に寄稿していただいた土橋さんらの参加者
による国際インターンシップ報告会の様子がユーチューブで見られます。残念ながら土橋
さんの発表部分はありますが、報告会の様子をライブで楽しめますので、是非、知求会
ニュースとあわせてお楽しみください。

さて、知求会ニュースも、無事12年目を配信することができました。これまでの原稿
執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお
迎え下さい。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP**
(<http://afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へ**
メールして下さい。 chikyukai@yahoogroups.jp